

# エッセー 自然が育む力

3月も中旬になると雪や小川が子どもたちの創解けの水の勢いや木々を造性育てるのに最高の揺らす風の中に、春の訪場であることは、みなそれを感ずるようになりまん周知のことと思ひました。毎年繰り返されるす。

春ではありませんが、その環境教育や自然保護活動すがすがしい芽吹きの色動の発端をつくったとさや神秘的な生命の躍動するアメリカのレイチェル・カーソンは「センス雪で思ふようにできなかつた自然の中の遊びを再開しよう。」

子どもは不思議や面白さを発見する天才です。のこを教えるなんて、足元の石ころや小枝が、どうしたらできるというたちまち遊びの要素として、わたしは、てなくてはならない宝物そこにいる鳥の名前すらに変わります。自然の森知らないのに！」と嘆き

の声をあげるのです。わも、「知る」ことは「感」と、面白いことを発見したしは、子どもにとって「じる」ことの半分も重要も、どのようにして子どもではないと固く信じていませている親にとって、そう、一緒に楽しいこ



森遊びに満足して帰る子どもたち

一緒に遊んでくれる大人がそばにいて、喜びが倍になり、さらに創造する意欲が湧いてきます。子どもを「育てよう」とするものではなく、周囲の豊かな自然などの環境や、傍にいる友達や人との関係の中で「育ち合う」ものだと考え、「関わり合う機会」を大切にしていこうとこそ最大の大人の使命と言えます。この春、一緒に森遊びへ出掛けませんか？

さて、この「自然が育む力」は今回で終わります。2年間にわたってお付き合いいただき、ありがとうございます。次回はずいぶん会いたいです。

(尼崎市立美方高原自然の家所長 田中誉人)

(おわり)

## 育ち合う機会を大切に

子どものそばにいる大人の使命